



世界遺産・二条城と重要文化財・京都国立博物館を舞台にした  
artKYOTO 2020 ~History in Action Festival~ のメインプログラム  
であるアートフェア「美術市」に出展いたします。

会場：京都国立博物館 明治古都館  
会期：2020年12月4日(金)～12月6日(日)  
[12月3日(木) プレス・関係者のみ特別内覧会]  
※事前予約制  
<https://artkyoto.jp>

## YUMIKO CHIBA ASSOCIATES | Booth 20

北井 一夫 | 柳沢 信 | 鷹野 隆大 | オノデラ ユキ | デイヴィッド・シュリグリー | 金氏 徹平  
Kazuo Kitai | Yanagisawa Shin | Ryudai Takano | Yuki Onodera | David Shrigley | Teppei Kaneuji



### デイビット・シュリグリー (1968-)

1968年英国マックルズフィールド生まれ。現在、英国ブライトンを拠点として活動。日々の状況と人間相互の関係を風刺的コメントで描く独特なドローイングスタイルと作品でよく知られている。また、ドローイングを中心とする一方で、彫刻、大規模なインスタレーション、アニメーション、絵画、写真、音楽など、幅広いメディアでも活動。2012年ロンドンのハイワードギャラリーでのミッドキャリア回顧展「Brain Activity」に続いて、2013年にはターナー賞にノミネートされる。2016年9月には「Really Good」をトラファルガー広場の「第4の台座」作品として発表する。また、2020年にはビジュアルアートへの貢献によりOBE(大英帝国勲章)を受賞している。現在 Yumiko Chiba Associates にて個展開催中(～2021年1月30日)。12月12日(土)には三輪健仁氏(東京国立近代美術館主任研究員)とオンライン配信(zoom/ウェビナー)にて対談予定(お申し込み: <http://www.nadiff-online.com/?pid=155311778>)。



### オノデラ ユキ (1962-)

オノデラは、独学で写真技術を身に付け作家活動をスタートさせた。1993年渡仏。2003年に写真集『カメラキメラ』で第28回木村伊兵衛賞、2006年にはフランスにおける最も権威ある写真賞「ニエプス賞」を受賞するなど、世界的な活動を続け、現在もパリを拠点に制作活動を行っている。オノデラの制作と思考は、一貫して、世界の模倣、写し、記録装置としての写真のありかたに揺さぶりをかけるような、〈写真の存在論〉〈カメラの存在論〉とも形容できる、独自の探究に捧げられてきた。主な個展に国立国際美術館(2005)、国立上海美術館(2006)、東京都写真美術館(2010)、ソウル写真美術館(2010)、フランス国立ニエプス美術館(2011)など。

### 金氏 徹平 (1978-)

1978年京都府生まれ、京都市在住。2001年京都市立芸術大学在籍中、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(ロンドン)に交換留学。2003年京都市立芸術大学大学院彫刻専攻修了。日常の事物を収集し、コラージュ的手法を用いて作品を制作。彫刻、絵画、映像、写真など表現形態は多岐にわたり、一貫して物質とイメージの関係を顕在化する造形システムの考案を探索。主な個展に「消しゴム森」(金沢21世紀美術館、2020)、「金氏徹平のメルカトル・メンブレン」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2016)、「Towering Something」(ユーレンス現代美術センター、2013)、「溶け出す都市、空白の森」(横浜美術、2009)など。そのほか、舞台美術や装丁も多数。自身の映像作品を舞台化した「tower (THEATER)」(ロームシアター京都サウスホール、Kyoto Experiment 2017)では演出を手掛ける。現在、京都市京セラ美術館(京都)での「京都の美術 250年の夢 第1部-第3部 総集編 -江戸から現代へ-」(-12月6日(日))に出展中。また京都芸術センター内にあるカフェ「前田珈琲明倫店」にて「tower (KITCHEN)」(by 金氏徹平 & 家成俊勝)がご覧頂けます。



## 北井 一夫 (1944-)

1944年中国・旧満州鞍山市に生まれる。1960年代、横須賀の原子力潜水艦寄港反対闘争をテーマにした「抵抗」や、大学民主化を要求する学生運動を撮影した「過激派・バリケード」等の刺激的な作品を制作、70年代に入ると日本の経済成長と共に急速に失われていく農村社会の営みを捉えたシリーズ「村へ」、「いつか見た風景」を発表する等、その眼差しは常に時代と向き合ってきた。1973年から1979年にかけて日本の農村を歩きながら撮り続けた



「村へ」で第一回木村伊兵衛写真賞を受賞。近年の主な展覧会に「建築 x 写真 このみに在る光」東京都写真美術館 (2018-2019)、「PROVOKE: Between Protest and Performance—Photography in Japan 1960-1975」シカゴ美術館 (シカゴ) /ル・バル (パリ) /ヴィンタートゥール写真美術館 (チューリッヒ) /アルベルティナー美術館 (ウィーン) (2016)、「For A New World To Come: Experiments in Japanese Art and Photography, 1968-1979」ヒューストン美術館 (ヒューストン) /グレイ・アート・ギャラリー、ニューヨーク大学 (ニューヨーク) ジャパン・ソサイエティ (ニューヨーク) (2015)、個展「いつか見た風景」東京都写真美術館 (2012) などがある。1964-68年に過激派の学生運動を撮り続けた写真を北井自らがセレクトした集大成的な写真集『過激派の時代』が2020年10月平凡社より出版された。



## 柳沢 信 (1936 - 2008)

1936年東京生まれ。2008年没。  
1957年東京写真短期大学技術科卒業、桑沢デザイン研究所入学、8月中退。  
柳沢は、デビュー当時から一貫して「写真に言葉はいらない」と言い続け、被写体や撮影者の感情、言葉が必要としない、写真だけで成立する写真に挑み、周囲の流行などにとらわれず自らのペースで目の前の世界をフィルムに刻み続けた。1960年に東京国立近代美術館で開催された「現代写真展 1959年」に日本を代表する49人の写真作家の一人として参加。1967年「二つの町の対話」「龍飛」などにより日本写真批評家協会新人賞受賞。1974年「15人の写真家」(東京・国立近代美術館)、1976年「NEUE FOTOGRAFIE AUS JAPAN」展 (Graz, オーストリア)、1990「東京 都市の視線」展 (東京都写真美術館) に出展。

## 鷹野 隆大 (1963-)

1963年福井県生まれ。1994年からセクシュアリティをテーマに作家活動を開始。女か男か、ホモかヘテロかといった二項対立の狭間にある曖昧なものを可視化することを試みた作品集『IN MY ROOM』(2005)で木村伊兵衛写真賞を受賞。その後は同テーマをポルノグラフィカルな形式を通して探求したシリーズ『男の乗り方』、無防備なセクシュアリティの表出が警察沙汰を招いた『おれと』など、性欲という“下半身の問題”をアイデンティティや社会規範との関わりの中で捉える作品を発表している。他に、“市場価値のない”身体イメージを集めたシリーズ『ヨコたわるラフ』、極めて身近でありながら顧みられることのない日本特有の都市空間を写した『カスババ』など、視覚表象における価値のヒエラルキーを問う作品シリーズがある。  
2011年の東日本大震災以降は影をテーマに種々の作品に取り組んでいる。2021年6月には国立国際美術館で個展を開催予定。

